



『ブラジル経済事情視察旅行を終えて』

企業は如何にグローバル時代に対応するか？

税理士法人TACT高井法博会計事務所
TACTグループ関連十三社代表

税理士 高井法博

去る六月六日～六月十五日の十日間に渡り、ブラジル・ペルー経済事情視察研修旅行を終えた。ブラジルは小学校時代より私のあこがれの国であった。今から五十数年前、当時の山県小学校五、六年の頃仲の良かった村井作治郎君と言う同級生が親戚も含め数家族で自宅等の資産も全て売却し退路遮断で南米ブラジルに移住することになった。何も解らない我々同級生は村井君から、ブラジルは国土も広く、暖かく大発展をしている先進国でスバライシイ国、パラダイスであるとの話を聞き、将来是非ブラジルで逢おうと誓い合った。校長先生始め、全校集会で壮行会を行い彼はブラジルに渡航し、その後夢破れて帰国したと聞いたが同級生の誰もが帰国後の彼の消息を知る者がいない。ブラジルと日本との関係は古く、日本からブラジルへの移住は一九〇八年に、神戸港を出港した「笠戸丸」で七八一名の開拓者がサントスの地に降り立つ時から始まり、二〇〇八年にはブラジル日本移民百年を迎えた。農業移民からスタートし、大変な苦勞を重ねて社会のあらゆる職業階層に進出した日系人は、『ジャポネス・ガランチード（日本人なら間違いない、

保証付き』といわれるほどに信頼され、今では一五十万人を越え日本以外では最多の日系人集団となっている。時は変わりブラジルは一九八七年以降、大規模な経済危機にみまわれ、逆に一九八〇年代から急速に発展した日本は世界二位の経済大国に発展した。そのような背景から逆にブラジルから日本には一時三五十万人の在日ブラジル人が住むなど中国、韓国について第三位となるほどである。今回は、時の流れに乗せることの重要性の再確認と、幼い時からの憧れの国、日本から最も遠い地球の裏側を巡る、人生の思い出を作る旅でもあった。

一・BRICS経済事情視察研修旅行のまとめとしてのブラジル旅行

BRICSという言葉は、ブラジル、ロシア、インド、中国の頭文字を並べたもので、ゴールドマン・サックス社の二〇〇一年、年次レポートで始めて使われた。その中で中国は二〇一〇年ごろに日本を、二〇四〇年頃にはアメリカを抜き世界一に、インドは二〇三〇年過ぎに日本を抜きアメリカに次ぐ第三の経済大国になり、二〇五〇年のGDP予測では、中国がトップに君臨し、次いで米国、インドと共に世界の三大

経済大国になり、続いて四位ブラジル、五位メキシコ、六位ロシア、七位インドネシア、八位日本と予測されている。BRICSs 各国が上位六か国に入ってしまう。一方日本は、メキシコ、インドネシアにも抜かれ八位になるといった大胆な予測である。BRICSs は世界経済のキーワードになると確信し、お客様が生き残るためにTACTの研修旅行でBRICSsを廻ろうと決意し、翌年の二〇〇二年中国、二〇〇六年はインド、二〇〇九年ロシアを訪問。今回は、その集大成としてブラジルを訪問した。ブラジルは世界第五位の国土（八五二万km²・日本の二・五倍）と人口二億弱と世界五位・経済規模は世界八位の大国である。恵まれた豊かな国土と、鉄鉱石を中心とし、レアメタルを含む百種類近い金属や宝石類を産出し世界の鉱物資源の宝庫といわれ、大規模な海底油田の発見により、二〇〇六年には百分自給率達成の豊富な天然資源を保有。また、世界有数の農業生産力がある。現在七十億人の地球人口は二〇五〇年には九十億を越えるという。将来の食料や水の需給は大きな国際問題である。アメリカや中国は山地や砂漠が多く、耕作可能地域で農業に利用されているのは、わずか二十％に過ぎない。世界の食糧需給国として、ブラジルの潜在能力は突出している。ブラジルの今日を支えているのは鉱物資源や農畜産物の輸出と共に、かつての長い軍政から民主制度に変革する中で、次々と経済復興計画が実施され、電力

等多くの事業が国営から民営化されたこと。インフラ整備事業やナショナルプロジェクトの多くは外国投資により支えられ貿易、資本の自由化、規制の緩和などが果敢に実施された結果である。こうした安定した政治の好リードで、総額及び一人当たりのGDPも大きく増加、失業率も大幅に低下し、二〇〇八年には対外債権が対外債務を上回り、外貨準備高も大きく増加した結果、国民所得は増え中間層が拡大し個人消費に支えられた内需拡大は、更に国内企業の積極的な設備投資や外資の進出を呼び込んでいる。自動車産業はここ数年二桁の生産台数の伸びを示し、クリーン・エネルギーとして世界の脚光を浴びるバイオエタノール、燃料価額高騰を追いつきに「エンブラ

